

1992年剣道日本4・5号 秘伝書抄訳シリーズより

佚齋樗山子著 中井一水訳

---

勝軒という剣術者がいた。

勝軒の家に大きな鼠が一匹いて、白昼堂々と部屋中走り回るので、勝軒はその部屋を締めきって、飼い猫に鼠を捕らえさせようとした。しかし、その鼠は飼い猫の面に飛びかかりあるいは、喰いつくなどしたので、飼い猫は泣き声をあげて逃げてしまった。しかたなく勝軒は、近辺から抜群に強そうな猫を集めて来て、すこし隙間を開けて部屋に追い入れたものの、くだんの鼠は床の隅にいて、猫がくればとびかかり、喰いつき、あまりにも凄まじいものだから、猫どもはすべて尻込みしてしまい、どれ一匹として鼠を捕ろうとしない。

この様子を見ていた勝軒は腹を立て、自ら木刀を持って鼠を追い、打ち殺そうとするが、木刀はまるで鼠に当たらぬばかりか、戸障子や襖を叩き破ってしまう始末。勝軒は大汗を流しながら、下僕を呼ぶと大声で言った。「六、七町先に、並々ならぬ古猫がおると聞いている。すぐに借りてきなさい」

早速、借りてきた猫を見れば、あまり利口そうでもない。が、かの部屋に入れると、例の鼠は身をすくめてしまって動かない。古猫は何事もなげに、のろのろと鼠のそばへ歩み寄ると、難なく鼠をくわえて戻ってきた。

その夜のことである。勝軒の家に多くの猫どもが集まり、かの古猫を上座に講じ、いずれの猫どもも、その前にひざまずくと古猫に言った。「われわれは抜群の猫を称賛され、その道の修行を積み、鼠ばかりかいたち、かわうその類まで捕らえられるほど、爪も磨いて研鑽してきた。しかしながら、いまだ今日のような強い鼠に出会ったことはなかった。それを御貴殿は、何の術をもってか簡単に捕らえられたが、願わくば、我らにもその妙術を教えていただきたい」すると、古猫は静かに笑って言った。「若い猫のみなさん。みなさんは、一生懸命に働かれたではありませんか。ただ、思わぬ不覚をとられたのは、いまだ正しい道理にかなった技法をご存

知でないからであります。まずは、みなさんの修行のほどから、お聞きすることにしましょう。」

古猫の言葉に、鋭い顔つきの黒猫が一匹前にすすみ出て言うには、私は鼠を捕獲する家柄に生まれ、以来、その道に心掛けてきた。七尺（約2メートル）の屏風を飛び越え、小さな穴にもぐり、小猫の時から早業、軽業を得意とし、ときには、眠ったふりをして策略をめぐらし、不意に桁や梁を走る鼠といえども、一度として捕り損じたことはなかった。

ところが今日、思いの外の強鼠に出会って、一生の不覚をとり、はなはだ心外に思っている、と。

聞いて、古猫は口を開いた。「ああ、あなたの修行は技法第一主義というもの。したがって狙う心が先に立っているのです。昔の人が技法を教えたのは、その道筋を教えんがため、ゆえに、その技法は容易ではなかった。その中に深い真理があるのだが、今日では技法だけを専らにし、ために種々の技を創り、技巧をきわめるので、単なる技くらべになってしまった。それでは、技巧が尽きれば、どうにもなりますまい。小人が技巧に走り、才覚に溺れると、すべてそのようになろう。心の働きといえども、道理にもとづかず、巧を専らとるときは、かえって害の多いもの。これを反省して、よくよく工夫することでしょう」

次に、虎毛の大猫が一匹まかり出ると言った。私の思うに、武術は”気の持ち方”を貴びます。ゆえに、気を練ることに長い修行をつづけてきた。そのため今はその気力も固く強く、天地に充ちている。気合でもって敵を倒し、まず勝利して後すすみ、声にしたがい、響きに応じて、鼠を左右につけ、変化にも応じることができる。行動するにも意識せずして、自然に湧き出るとく振る舞うことができ、<sup>けた</sup> <sup>はり</sup> 桁や梁を走るも可能だ。ところが、彼の強鼠は来るに形なく、往くに跡がない。これはどういうことなのでありましょうか。

古猫がゆうには、その修練は、気の勢いによって働くものでしかない。つまり、自らの気力をたのみとするもので、最前のものではない。われ破らんと欲すれば、敵もまた破ろうとしてくる。また破ろうとして破れぬものがあったときはどうするか。決して己だけが強く、敵はみな弱いというものではない。天地に充がごとき気と思っているものは、すべてうわべだけの勢いでしかない。それは孟子の浩然の気と似て、実はまったく相違するものなのだ。孟子はよく

見える目を持ち、物事を見分ける知力を備えて剛健だが、あなたのは勢いに乗じた剛健であるから、その効果のほどもまた同じではないのだ。たとえば、滔々と日夜流れる大河と、一夜の洪水の勢いとの違いというもの。氣勢に屈しない敵があるときはどうするのか。俗に「窮鼠猫を囓む」のたとえもある。そのような敵は、必死になり、生命を忘れ、欲を忘れ、勝負を度外視し、身の安全など心中になく無心である。こうした敵に、勢いだけでどうして勝てようか。

古猫の話が終わると、灰色の少し年を経た猫が静かに前へ進みでて質問した。「仰せのとおり、気は旺盛ではあっても象（かたち）があり、象のあるものは微小であっても見えるもの。私は長く心を鍛練して、氣勢をなさず、相争うことなく、何事も相和してきた。私の術は幕を張り巡らせて、つづて（石）を受けるようなもので、強鼠といえども、私に敵しようとしても相手ではない。ところが今日の鼠は、勢いにも屈せず、和にも応じず、まさに神のごとくで、私はいまだにこのような鼠をみたことがない」

灰色の老猫の話しに、古猫は答えて言った。「そなたの和は自然の和ではなく、考えてなせる和であり、したがって気をはずさんとしても、僅かな妄念が生じれば、敵はそれを知るのである。また、私心をはさんで和をなせば、気は濁って情してしまうものだ。思い考えてなせば、なにごと自然の感をふさいでしまうため、妙手はどこからも生じない。ただ、思わず、なすこともなく、感にしたがって動けば生ぜず、天下に敵すべき者はいなくなる。とはいえ、各々が修行するところのものを、すべてが無用のことというのではない。気のあるところ必ず理があり、理のあるところ必ず気は離れずにあるから、動作の中に理に至るものはあり、気はまた一身の用をなすものである。その気がおおらかなるときは、物に応ずること無窮（むきゅう）で、和する場合は、力をもたずして金石に当たろうとも、けっして折ることもない。わずかに思考することが、すべて作意となってしまうのだ。ゆえに敵する者は心服しない。なんの術をも用いる必要はない。ただ無心に、自然に応じられるがよかろう。道には極まるころはないから、私のいうところをもって至極と思ってはならない。昔、私の郷に猫がいた。終日眠っていて氣勢もなく、木で作った猫のようであった。人々も、その猫が鼠をとるのをみたことがなかったが、その猫のいくところ、近辺に鼠の姿を見ることはなかった。そこで、私はその猫のところへ行き、その理由を質したのである。が、その猫は答えず、四度も問うたが、四度とも

答えなかった。これは答えなかったのではなく、答える理由がなかったのであった。それでわかったことだが、真に知るものは言わず、言うものは真を知らないものだ。その猫は己を忘れ、ものを忘れて無物に帰していたのである。まさしく”神武にして不殺”（註）というものであった。私もまた彼に、遠く及ばなかった」

古猫のこの話を、勝軒は夢のごとく聞き入っていたが、やがて、古猫に会釈するとやおら口を開いていった。「私は剣術の修行をはじめて久しいが、いまだその道を極めることができないでいる。今宵は各々のお話を聞いて、ずいぶん悟るところがあった。願わくば、なおその奥義を示していただきたいのだが……」

古猫曰く、「否。私は獣であり、鼠は私の食するところのもの。私がどうして人のすることを守りましょうや。しかしながら、私がひそかに聞いたことがある。”それ剣術は、専ら人に勝つためにあらず。変に臨みて、生死を明らかにする術なり”と。武士たる者は常に心を養い、その術を修行しなければなりません。ゆえに、まずは生死の理に徹し、不疑不惑、才覚・思慮を用いずに、心気和平にして、静かに安らかで平常心であれば、変化に應じることは自由自在となる。だが、この心にあらざる場合は、状（かたち）が生じ、敵が生まれ、相對して争うことにもなって、変化に適應できなくなるのだ。つまり、己の心が先に死地に落ちて靈明さを失うので、どうして快く勝負が決せられよう。たとえ勝つことがあっても、それは”まぐれ勝ち”でしかなく、剣術の本旨ではない。無心無物といっても、空しいといったようなものではない。心はもともと形もなければ、したがって物を蓄えることもできない。そのの僅かでも蓄えるものがあれば、気もまたそこへ<sup>よ</sup>拠ろうとし、そうなれば豁達（かつたつ）自在に在ることはむづかしくなる。向かうところは過となり、そうでないところは及ばなくなり、過は勢い<sup>あひ</sup>溢れてとどまらず、及ぶときは用をなさなくなり、ともに変化に適應できなくなるのだ。私がいうところの無心、無物とは、蓄えず拠らず、敵もなければ我もなく、易にいうとこの”思うことなく、なすことなく、ひっそりと動かず、天下のことに感じてついに通ず”で、この理を極めるに近い」

そこで勝軒は、再び質問した。「敵なく、我なくとは……」

古猫はいう。「我あるがゆえに敵があるのだ。我がなければ敵もあるまい。敵というのは、陰・陽・水・火と同様である。およそ形あるものは、かならず対するものだ。己の心に象（か

たち)がなければ、当然、対するものもないわけで、争うこともない。これを、「敵もなく、我もなし」という。物と我ともに忘れて、静かに安らかに、一切の妄念を絶てば、和して、一つになろう。敵の形を破っていても、我もそれを知らない。否、知らないのではなく、そこに心がなく、感のままに動いている、ということであろう。この心は「世界は我が世界」であって、是非、好悪などにとらわれないことを指す。すべては、己の心から苦楽・得失が生じるのであり、天地広しといえども、また、己の心の外に求めるものはないのである。古人曰く、「眼裏塵(ちり)有りて三界窄(すぼ)く、心頭無事一生寛(ゆたか)なり」と。すなわち、目の中に僅かのちりが入れば、眼を開くことができない。外来、あるべき筈のないところに、ものが入るからそうなるわけだが、これは先の心のたとえなのである。また、古人の曰く、「千千万万人の敵の中に在って、この形は微塵になるとも、この心は我が心なり」と。孔子曰く。匹夫も志を奪うべからず」と。もし、迷うときは、その心が敵を助けるのだ。私のいうことは、ここまでである。あとはただ、自ら省みて己に求めることだ。師はその事(わざ)を伝え、その理を悟すだけだ。その真を得るのは、我にある。これを自得という。あるいは、「以心伝心」ともいう。禅学だけではなく、聖人の心法から芸術の末に至るまで、自得のところはすべて以心伝心である。教えるというのは、己に有っても自ら見ることのできぬところを、指して知らしめるだけである。師から授かるのではない。教えるのも易く、それを聞くのも易い。ただし、己にあるものを確実に見つけ、己のものとするのは難しい。これを修行上の一眼目という。悟りとは、妄想の夢のさめたもので、覚(さとる)ということとも同じであり、格別変わったことではないのである。

(註) 周の文王を賛えた言葉。文王は神のごとき武勇をそなえながら、あえて兵を興さず、人を殺さずに、泰然としてときを待ったという。

### 「われ未だ木鶏たりえず」

酒の席で、安岡は『莊子』達生篇にある木鶏の話をした。

その座に横綱双葉山がいたが、双葉山を意識してしゃべったわけではない。

昔、王のために闘鶏を養う名人がいた。

ある日、王は名人に尋ねた。

『どうだ、もう闘わせてもいいかな』

ところが名人はこう答えた。

『いや、まだいけません。いまはちょうどから威張りして、自分の力を当てにしています』

しばらくして、王は名人に催促した。でも彼はうんといいません。

『まだいけません。他の鶏の姿を見たり、鳴き声を聞くと興奮します』

しばらくして、王はまた催促した。名人はまだ許しません。

『まだです。傲然と構えておって、血気が盛んでいけません』

その後、王が重ねて催促したとき、彼はやっと承知した。

『まあ、よいでしょう。もう他の鶏の鳴き声を聞いても平気です。ちょっと見ると、まるで木で作った鶏としか見えません。徳が充実したのです。これでどんな鶏がやってきても、天下無敵です』

戦いというものはこうでなければいけない。徳が充実してくれば、戦わずして勝つ、つまり相手を呑んでしまうことが起こる。双葉山はこの話にじっと聞き入っていた。横綱双葉山といえは、連戦連勝の関取で、不世出の横綱といわた。安岡は相撲は単なる勝ち負けではなく、心を鍛練し、天にいたる「道」だと考えたのである。

安岡はこの話をしたことを忘れていた。ところが、昭和14年1月、欧州旅行の途上、安岡が乗った船がインド洋上にあったとき、無電が鳴った。「ワレイマダモッケイタリエズ フタバヤマ」安岡は一目電文を見て、双葉山の連勝が阻まれて土がついたことを知った。安芸の海に破れ、歴史的記録は惜しくも69連勝で終わった。連勝中、いつも双葉山の心の中にあったのは、もはや勝敗のことではなく、木鶏の話だったのである。

現役から引退した双葉山は、のちに相撲協会理事長に就任した。昭和34年12月、時津風は安岡の自宅を訪ね、「木鶏」の揮毫をお願いした。これを契機に集まりが持たれるようになった。安岡はこの会の名を「木鶏会」とした。

(安岡正篤の世界 神渡良平著 同文館より)